

「自分の言葉」を他者と共に広げ深める力を育てる言語活動の実践  
—哲学対話と文章読解の往還による「言葉の力」の育成—

大館鳳鳴高等学校 伊藤 崇志

### 1 主題設定の理由

総合的な探究の時間では、探究の意義や価値を理解し、実社会や実生活と自己との関わりから問いを見つけ、主体的・協働的に取り組むことが求められる。しかしながら、実際に行う探究活動の活性化の度合いには個人差があり、調べ学習に終始してしまう生徒も多数見られる。

また、国語科の授業においても、授業者の発問が生徒の自由な発想を求める問いであったとしても、模範解答を探すことに囚われ自ら思考を巡らせることから逃れてしまったり、協働的な話し合いの場であっても一部の生徒の発言に同調してしまったりする傾向がある。このような現状から、文学国語の言語活動として哲学対話を取り入れることで「自分の言葉」で語る力を育成し、教材の読解をさらに深めることで新たな問いを見出し、主体性や協働性を涵養することができると考え、本主題を設定した。

### 2 研究の内容

哲学対話とは、マッシュー・リップマンによって提唱された対話の方法論を指す。複数名で話し合いをする際、ボールを持っている人が話し、その他は聞き役に徹する。ボールを持つ人は自身のペースで語るができるため、発言が促進されるというものである。

本研究においては文学国語の授業において哲学対話を実践することで、生徒一人一人に「自分の言葉」で語る力を身に付けさせることができるという仮説のもと、効果的に哲学対話を用いた一試案としての授業を構想し、実践した。ただし、本実践では哲学対話をあくまでも教材となるテキストの読解を促進するための言語活動として取り入れている。そのため哲学対話と教材の読解を反復しながら対話を促すものの、対話が教材の内容から乖離しないように配慮した。

- ◎話したいとき、手を挙げてボールをもらう。
- ◎ボールを持っている人が次に話す人を決められる。
- ◎まだあまり話していない人を優先してボールを渡す。
- ◎もしボールが回ってきて話したくなければ「パス」ができる。

#### 哲学対話の手順

対象生徒は大館鳳鳴高等学校普通科文系2年B組の生徒38名とし、教材は井上ひさし「ナイン」（『文学国語』数研出版）とした。2年B組は落ち着いた生徒が多く、問いかけに対して授業中に活発に意見が飛び交うことは少ないクラスである。しかしながら、授業の振り返りとして入力させるグループワークの感想では、自身の意見を積極的に述べ、疑問を投げかけてくる生徒も多い。教材の「ナイン」は、昭和の中期から後期にかけての時代の変化と人々の絆を描いた短編小説である。美化された過去の物語と不遇な現在とのコントラストが際立ち、友情のありさまについて哲学対話を行う上では最適な教材であると判断した。哲学対話に慣れていなくても「ナイン」を教材とすれば比較的対話も活発になりやすいであろうという期待のもと、授業を実施した。単元としては全3時間を想定して展開した。

1時間目に授業の核となる問い（友情とは何か）について哲学対話を行った。この段階では本文テキストにはあえて触れさせず、あくまでも主題となるキーワードについて自由に発想させて行う対話とした。ここで哲学的対話を行うことにより、生徒の思考の現状を授業者も生徒も把握すること、また後の

段階で行う哲学対話の練習という意味合いもあった。その後テキストを通読して全体の内容や展開をクラスで共有した。2時間目には教材の読解を意識した問い（「ナイン」の友情に共感できるか）のもと、再び哲学対話を行った。内容や展開を踏まえた上で登場人物の心情に踏み込んだ思考を促し、どのような意味を持つ作品であるかを考察させた。加えて、皆で対話してみたい対話してみたい新たな問いを生徒に発案させ、グループごとに集約した。3時間目には生徒が発案した問いをクラスで共有し、授業者が選んだ問い（もし優勝していたら、現在はどうなっていたか）について哲学対話を行った。さらに最初に扱った問いについても再度対話を実施し、生徒自身の思考に変化や深まりが生じたかを明らかにした。全体を通して生徒の意見を反映した授業展開を行い、主体性が喚起されるよう意識した。

以上の授業の実際をふまえて、生徒の「『自分の言葉』で語る力」を伸長する上で哲学対話がどのような効果をもたらしたかについて、以下の3つの観点から考察する。検証に用いるものは授業の最後に振り返りとして入力させるグーグルフォームの記述内容やアンケート項目とする。

- (1) 哲学対話の前後の思考の深まりについて（「友情とは何か」に対する解答の比較）
- (2) 新たな問いの発案について（「皆で対話してみたい新たな問い」の発案）
- (3) 哲学対話による主体性や協働性の変容について（アンケート結果と行動観察）

### 3 成果と課題

#### (1) 思考の深まりについて

1時間目と3時間目の授業で行った「友情とは何か」という問いに対する答えをグーグルフォームに入力させた。意見の変化がない生徒も複数見られたが、多くの生徒には変化が見られた。1時間目の意見は自身の経験に基づくシンプルなものが多いのに対し、3時間目においては教材の内容を踏まえ、記述内容が増加したことに加えて価値観の深化も確認できる。特に英夫と正太郎の間にあるものは友情ではないとする意見が複数出ており、授業者が想定していた内容を越える洞察に至った生徒も複数いた。

1時間目		3時間目
何でも気を遣わずにできる関係	⇒	何でも気を遣わずにできる関係
誰かとその場所、そのときでしか得られないもの	⇒	誰かとその場所、そのときでしか得られないもの
お互いが気を許した関係であり、なにかあったときには助け合いたいという感情	⇒	ナインを通して考えて極端に言うと、犯罪を犯し犯されても相手を助けたい守りたいという感情なのではないかと思った。
仲いいとか一緒にいたいとか思うこと	⇒	他人には理解しがたいものもあるがその人達同士で決まるのであって第三者からはわからないもの
だめなことはだめと言い合える関係	⇒	ナインを読んでも友情は駄目なことは駄目と言い合える関係だと思いました。悪いことをしてそれを庇うだけが友情ではなくて、すべて良いように終わらすのではなくてその人のためにも駄目といえるのが友情だとおもいました。
だめなことはだめだと言える関係	⇒	友情の概念は変わっていないが、ナインの中での友情は私の中での友情に当てはまらないため分からない。
自分よりも相手を優先して思い、行動することができるもの。簡単に生まれるものではない。	⇒	ナインの友情は偽物。本当に友達を思うなら、間違いを正してあげるべき。つまり、正太郎を通報するべき。友情とは、薄れるものではなく、永遠に途切れることはない、大切な存在。

友情とは何かに対する解答の変化

(2) 新たな問いの発案について

2時間目の授業で集約した新たな問いを表に挙げる。④、⑤、⑧、⑨は教材の内容からは当然の疑問である。直前の対話（「ナイン」の友情に共感できるか）でも話題に上ったと考えられるし、生徒の常識に照らし合わせれば、友情以外の理由が他にあったと考えたくなるのも頷ける。一方で、①や⑥といった視点は、あくまでも本文に根拠を求めつつ議論を重ねることができれば、解釈の多様性を広げるものではないだろうか。英夫の正太郎に対する友情のあり方について、「準優勝」という事実が、何か決定的な影を落としているという考えは、一人で考えてはなかなか出てこない視点であるように思われる。また、③に関しても、語り手側と対極の側の視点に立って考えようとしている点において、より読解を深める問いとなっているといえる。

①もし優勝していたら現在はどうなっていたか。
②なぜ「ナイン」なのか。（タイトルの意味）
③なぜ正太郎は変わってしまったのか。
④なぜ二人は正太郎をかばうのか。
⑤なぜ正太郎を警察に届けなかったのか。
⑥もし優勝していたり、初戦敗退したりしていたらどうなっていたか。
⑦正太郎が他のメンバーに与えた影響は？
⑧なぜ英夫は正太郎をかばうのか。
⑨どうして二人は正太郎をかばうのか。

グループで話し合ってみよう

(3) 主体性や協働性の変容について

①アンケート結果

今回の研究では哲学対話を取り入れなかった授業でのアンケート結果をまとめていないため比較ができていないが、哲学対話による主体性の向上は見られなかった。もともと文学作品に関心を持つ生徒も多数おり、以前から授業に対するモチベーションが高いクラスであったことも要因と考えられる。

自己評価項目（5点満点）	1時間	2時間	3時間
興味や関心を持って取り組んだ	4.66	4.71	4.63
楽しみながら学んだ	4.71	4.69	4.66
学習の目標を意識しながら学んだ	4.51	4.60	4.51
学び方を工夫して学んだ	4.24	4.17	4.17
一生懸命学んだ	4.54	4.69	4.49
粘り強く学んだ	4.37	4.31	4.40

アンケートの平均点

②行動観察

普段のグループ討議などを見ていると、自己表現の得意な生徒に発言する場面が偏りがちになることは否めない。哲学対話においてもそれは同じであるが、コミュニティーボールによって発言者に注目を集めること、そして発言者が言葉を紡ぎやすい状況を作ること、授業において有効に作用するといえる。実際に3回の授業を通して生徒も対話の雰囲気慣れ、議論が活性化し、自己開示していく様子が見受けられた。

最後に3時間目の生徒の感想の一部を紹介する。

### 生徒の感想

#### 【生徒A】

最初は正太郎がなぜそんなにチームメイトから信頼されているのかわからなかったけど、信頼されるに値する経験が過去にあってそれが今の彼らの心に刻みこまれているからこそ正太郎を信頼し続け、かばっているのだとわかった。また、その経験をしたものにはかわからない特別な思いがある。これは自分も深く共感できた。

#### 【生徒B】

英夫が警察に届けられないのは、ただ正太郎と野球をしていたからではなく、成長しても消えない友情や思い出、信頼があるからだと思った。

#### 【生徒C】

自分がナインの登場人物になったと考えたとき、やっぱり私なら彼らのように正太郎を許せないと思ったので、そこは謎が増した気がした。でも、ずっと一緒にやってきたメンバーだからこそその理由があると思うと少し納得できたし、個人個人の気持ちになることでナイン全体への理解は深まったと思う。

#### 【生徒D】

本文中に書かれていないことについて考えたことがなかったし、今回やった野球チームが優勝していたらどうなっていたかという問いに関しても、自分が考えていた事と全く逆の考えの人もいて、その点で解釈が深まったなと思った。

#### 【生徒E】

友情ということに焦点を当てると友情のすごさがわかるけれど、友情は単なる人同士の関係だけでなく、その人と過ごした環境や状況があるからこそ紡ぎ出される言葉があり、友情があるのだとわかった。

今回は国語科の「読むこと」の授業として、テキストから離れずに思考するよう生徒に促した。比較的生徒が身近に感じやすい教材であったため、テキストから乖離することなく対話が進んだが、教材の内容によっては哲学対話が難しいものもあるだろう。また、このような教科における取組が、すぐさま探究活動の促進に影響するわけではない。しかし、今回の実践を通して「哲学対話」が国語科で『「自分の言葉」で語る力を育成する言語活動』として有効であることを示すことができたのではないだろうか。次世代を担う生徒の「言葉の力」の育成を目指して、これからも積極的に対話を基軸とした授業を展開していきたい。